

「カイゼン」を通じて途上国の中小企業振興などを担当する、JICA産業開発部の筱窓香さん。それぞれの国・現場に適した「カイゼン」が広まるよう、心掛けている。

「カイゼン」を通じて途上国の中小企業振興などを担当する、JICA産業開発部の筱窓香さん。それぞれの国・現場に適した「カイゼン」が広まるよう、心掛けている。



JICA九州で研修に同行する篠さん(左)。効率的な生産を目指し、さまざまな工夫を取れ入れている企業を視察

日本の中小企業政策・地場産業振興について学ぶために来日した研修員と

「国

際的な舞台で活躍してみたい。漠然とそう思い描いていた学生

時代、交換留学で1年間学んだイギリスの大学で開発経済学に出会い、南北問題や開発援助に関心を持つようになりました。また、母国のNGOで働いていたベトナム人のルームメイトがJICAの活動についてよく知っていたので、話を聞く中で「いつか自分もJICAで国際協力に携われたら」と考えるようになりしました。

民間企業で3年間経験を積んだ後、JICAに転職し、JICA九州で国内研修業務を担当することになりました。そこで私が最も興味をひかれたのが、途上国の中小企業振興や生産性向上などを目的とする研修です。「カイゼン」や「5S」を導入し、優れた業績を上げている九州の企業の視察に担当者として同行し、小さな工夫を数多く取り入れながら、生産性や職場環境の向上に励む日本企業に感銘を受ける研修員の様子を、何度も目の当たりにしてきました。もちろん、私にとってもそれは同じ。思わず研修員と一緒に、必死にメモを取っていたこともありました(笑)。

する行政官などが中心でした。そのためいつからか、「帰国した彼らが、日本での経験をどのように生かしているのか、その成果を確かめてみたい」という思いが生まれてきました。2年間の国内研修業務を経て、自ら志望して今の部署に異動したのには、そんな理由があったんです。

現在は、メキシコやチリ、セルビア、コロンビアなどで実施している中小企業振興支援を主に担当しています。これらの国では最近、中小企業の経営全般や、品質・生産性向上に関するコンサルティングへのニーズが高まっており、「中小企業の経営を指導できる人材を育成したい」という声が大きくなっています。そこで、「カイゼン」に精通するコンサルタントやアドバイザーを育成したり、そのための制度を構築する支援を開始しました。その中で私は、現地事務所や長期専門家、中小企業振興を担当する相手国の関係機関と連絡を取り合いながら、プロジェクトの進捗管理や目標達成状況の確認、運営上のさまざまな問題の解決に努めています。

「カイゼン」は、高価な機材や設備を導入しなくても、身の丈に合ったことから始められるため、途上国のさまざまな製造現場などで効果を発揮するはず

です。とはいえ、日本で実践されている内容を文化や国民性の違う国にそのまま持ち込んでも、必ずや成功するとは限りません。例えば従業員数の少ないヤモチベーションを高める方法一つとっても、合う合わないがあるはず。最終的に、現地のコンサルタントやアドバイザー、関係機関の人々が、日本ではぐくまれてきた理念をよく理解し、あくまで自分たちに合った進め方、方法で取り入れていくことが大切です。「カイゼン」の高い自立発展性を促すため、プロジェクトを進める上で私が常に忘れないようにしている視点です。

うれしいのは、現地に出張した際に研修員に再会し、日本で学んだことを生かして「カイゼン伝道師」として活躍している様子を目にしたとき。「研修での気付き」から「実践」という、プロジェクトの成果の一つを見た喜びと、この仕事のやりがいや面白さを実感する瞬間



JICA産業開発部
産業・貿易課
筱 窓香
SHINO Madoka

大学卒業後、民間企業に3年間勤務した後、2008年1月JICAに就職。JICA九州・研修業務課を経て、2010年4月より現職。



グアテマラの地場産業振興について現地の経済省と共催したセミナーに出席(右)